

## 「海と山のむすびつき…見渡権現由来」

「けせんぬま 口碑伝説散歩」「松岩百話集」から

ひところは「海と山」といえば行楽地ということで、それ以外の結びつきなど考え得なかつたものだ。ところが、約三十年以上前になるか、唐桑町の牡蠣養殖の畠山重篤氏によって「森は海の恋人」運動が始まった。その当時人々は畠山氏を奇人扱いしていたことを思い出す。しかし、日本の沿岸、近海の異常に気づいた学者から、氏の行動の科学性とその信念に基づいた室根山への広葉樹の植樹運動は高く評価されるようになった。氏は、今や京都大学の客員教授であり、平成二十四年二月に国連「フォレスト・ヒーロー」に選ばれており、わが気仙沼どころか日本の名誉でもある。また、氏の学校教育、環境教育における貢献はあまりにも多大である。すでに十年位前からは教科書に掲載されており、社会科での環境学習の教材となっている。



氏がなぜ室根山系に植林するのか。それは氏の牡蠣養殖業に深く関係する。昭和四十年代、唐桑の舞根湾をふくむ気仙沼湾は、赤潮に悩まされた。湾内の高窒素化が原因で動物プランクトンが大量発生したのだ。このため海水が低酸素化し植物プランクトンは死滅した。そして養殖業が大打撃を受けたのだ。氏の研究と海外調査によれば、山の広葉樹林が川の水に養分を富ませ、その川が湾内に注ぎ込めば、植物プランクトンが大量に発生すること。植物プランクトンのおかげで、養殖の漁場はもちろん湾全域も近海も生態系が正常に保たれ、さらに豊かになる。このようなメカニズムが明らかになった。気仙沼湾に注ぐ大川。大川の水源である室根山系に広葉樹を植樹することの価値を再認識することは、環境を守ることや、さらなる豊穰の海を形成することへとつながっていくのである。

さて、この畠山重篤氏の長年にわたる研究実践

は、実は、古代から、海・舞根湾と山・室根山とがつながっていたことの証左となった。つまり海と山は古代からつながっていたということである。これは、私達気仙沼に住む者にとって非常に意義深く、気仙沼人としてのアイデンティティーの確認にもつながる。

「室根山由来」によると、今から千三百年前、勅願によって室根神社が創建された。この時に国造の藤原押勝が神霊を船で運んできた場所が唐桑の鮪立で、同じ唐桑の舞根に仮宮を建てたそう。その後、室根神社の祭礼では唐桑の潮水と柳の鞭が奉納されるようになったという。このような古事、海と山の関係を示す神事から、山と海の連環を、古代人が何らかの形で分かっている、それを神事として伝承したとも考えられる。長の森山系を水源とする面瀬川と尾崎の海や鼎浦の豊穰にも、山、川、海の連環があるのは当然で、面瀬小の五年生は毎年このことについて学習している。

そして、やはり古事があった。それが千岩田の「見渡権現由来」である。その言い伝えをもとに「新・昔ばなし」という創作の立場から物語ろう。

神話の時代である。三人姉妹の女神の話である。日本では、女神はイザナミ、アマテラス、コノハナサクヤヒメなどそれほど多くはない。少ない女神が姉妹であるとの言い伝えはない。だからどんな姉妹かはよく分かっていない。分かるのは、この由来から

きつと仲が良くなかったのだろうということだ。女姉妹が仲が良くないというのはめずらしい。これはきつと三人が三人とも美しかったためだろう。しかも絶世。美しいと、本人は大いに得をするが、心には常に嫉妬心がおこる。「私は〇〇よりも美しいかどうか。」と。白雪姫は西洋でのそのよい例だろう。

ある時、三姉妹はめずらしく仲良く、千岩田の姥が崎に来ました。一番上の姉がさそったのです。

「妹たちよ、何となく気詰まりな生活といつても感じます。死んで黄泉の国にいらっしやるお父様お母様に申し訳ありません。もっと仲良くするためにワダツミの神様にお願ひに行きましょう。年に一度、陸奥の国三陸の海の姥が崎にいらっしやるワダツミ様が願ひをかなえてくださるとのことです。」

妹たちも同じ気持ちだったので、三人はは



るか遠くの国から陸奥の国ヶセンの千岩田までやってきました。かなり道を、歩いた空を飛んだりしてきたので、三人は疲れ果て、やっと着いた姥が崎で寝てしまいました。

末の娘の夢にワダツミが現れ、悲しそうな顔で話しかけました。

「三姉妹の末娘よ、この世はどういうわけか、にこった心が満ちてきて、わたくしの住んでいる海もにこってきておる。この海を富ますには、山々の木々にこの海の潮水をもたらすことが肝心じゃ。わしの見立てによれば三姉妹のうち一番美しきは末娘よ。是非にもおまえが陸奥の山々に潮水を運び給え。一番の美しき女神が潮水をもたらせば、山の神々はお喜びになって、海の生き物が増えにふえる透明な川水をめぐんでくださるじゃろう。」

と。末娘の女神は、目をさますと、三姉妹が仲良くなりたいたいという心はどこへやら。「一番に美しい。」と言われ、天にものぼる心地になりました。大きな桶に潮水をたくさん汲んで、陸奥の真ん中の山を越えて最上の国まで登って、最上の山の神に潮水をささげました。そして最上の山の神と結婚したのです。ところで、最上の豊かな川水はワダツミのいる海とは反対向きの川に流れてしまいます。ワダツミがいくら待っていても、きれいな水は流れてきませんでした。

次にワダツミが夢に現れたのはまん中の女神でした。

「中の娘よ、おまえの妹はわしの心も知らずに、ただ美しいだけで有頂天になって、おろかにも最上の国の女神となった。こちらの海はまだにこたままじや。わしの見立てによれば、三姉妹のうち美しかつ賢いのは中の娘よ。間違ひなく潮水を羽田の山の神にささげたまえ。さすればこの海は澄んで豊かになるであらう。」

と。中の女神は目をさますと、美しくかつ賢いと言われて、妹よりも姉よりも賢さがあると思ひ、仲良くするとう願いを忘れて「美しいのにあわせてだれより賢いのだ。」と天にものぼる心地になりました。大きな桶に潮水をたくさん汲んで、羽田の神様に潮水をささげました。すると羽田の神様は、「潮水は実ありがたい。しかし、この潮水はどこかにこりがある。何のにこりか女神よ分かるか。」



と聞きました。賢い中の女神は考えました。そして、三姉妹仲良くするはずが、ただ一人でワダツミの言うことをおこない、ただ一人幸せになろうとしたことを恥じました。すると、羽田の神様は喜んで、澄んだきれいな水を面瀬川に流し始めました。海は豊かさを取り戻しました。そして中の女神は羽田の山の神と結婚しました。



姉は「見渡権現」となりました。しかし、ワダツミは二人の妹の心を許しませんでした。だから、姉に、最上と羽田に行くことを禁じたとのことでした。

心優しく心美しいことが見目形の美よりも大切なことを教えてくれるお話です。そして、海と山のつながりも。

なお、松岩百話集にある「石匠宇七と尾崎」（及川起雄氏執筆）では、頼朝による

姉の女神は美しく賢くそして優しさがありません。だからこそ、三姉妹が仲良くなるようにとワダツミの神に願うために、姥が崎まで来るようさそったのですから。姉が目をさました時、ワダツミが現れて、二人の妹女神のことを告げました。姉の女神は、姥が崎から、二人の妹のことを思い、涙を流し、いつまでもいつまでも最上と羽田を見渡していました。ワダツミは、その美しい心にひかれて、姉の女神と結婚しました。このようにして、

義経討伐の際に、義経を慕ってこの地を訪れた尾形三郎維義兄弟の姉が、この地に残り見渡権現になったとの言い伝えを掲載している。



▲千岩田の家号「宮崎」(尾形家)  
の地内にある見渡権現の場所に  
祭られた祠(ほこら)